

## 西欧におけるドストエフスキイの初訳

池田, 和彦  
明治大学

<https://doi.org/10.15017/16071>

---

出版情報 : Comparatio. 12, pp.22-27, 2008-11-20. Society of Comparative Cultural Studies,  
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

## 西欧におけるドストエフスキイの初訳

池田和彦

(1)

19世紀後半それまであまり関心の向けられることのなかったロシア文学が西欧で注目されるようになるひとつのきっかけとなったのが、1886年に刊行されたヴォギユエの『ロシア小説』(*Le Roman russe*)であったことはよく知られている。ゴーゴリ、ツルゲーネフ、ドストエフスキイ、トルストイの四人の作家をとりあげたこの本は、19世紀初頭スタール夫人の『ドイツ論』(1810)がドイツ文化の紹介においてはたしたのに匹敵する役割をはたしたといわれる。<sup>1</sup>同書をもとになる論文は1879年から『両世界評論』などの雑誌に発表されはじめ、ドストエフスキイの章は83年に発表されたが、西欧でのドストエフスキイの翻訳が本格的に始まるのも80年代前半からであった。すなわち81年に『死の家の記録』の英訳、82年に『死の家の記録』と『罪と罰』の独訳、83年に『貧しき人々』の仏訳が出版され、これ以前には一つ64年に『死の家の記録』の独訳があった。

しかし、日本ではあまり知られていないが、さらにさかのぼって1855年に『貧しき人々』の一部がフランス語で翻案されていて、これが現在判明している限り西欧で最初のドストエフスキイの翻訳である。<sup>2</sup>『ロシア・デカメロン』という小説集にオドエフスキイ、ザゴースキイ、ラジェーチュニコフ、イスカンデル(A.ゲルツェン)らの作品とともに収録され、『娘刺繍師』(*La brodeuse*)という題がつけられていた。<sup>3</sup>これは『貧しき人々』のヒロイン、ワルワーラ・ドブロショーロワをめぐる設定を変え、原作でマカール・ジェーヴシキンへの手紙に書かれた彼女の子供時代の回想を手帳に書き残した手記として中心にすえた短

---

<sup>1</sup> Pierre de Vogüé, Eugène-Melchior de Vogüé et *Le Roman russe*, dans *Eugène-Melchior de Vogüé, le héraut du roman russe*, Textes réunis et présentés par Michel Cadot, Paris, 1989, p. 9.

<sup>2</sup> フランスでのドストエフスキイの翻訳については、V. Boutchik, *Bibliographie des oeuvres littéraires russes traduites en français : Tourguenev, Dostoevski, Léon Tolstoï*, Paris, 1949. 参照。日本で知られている西欧でのドストエフスキイの翻訳については、『比較文学年誌』第24号別冊(早稲田大学比較文学研究室、1988)のドストエフスキイ翻訳年表を参照。

ただし、J. Meier-Graefe, *Dostojewski : Der Dichter*, Berlin, 1926, S. 520. によれば、1846年か47年に『貧しき人々』の断片がW. Wolfsohnによって翻訳され、名前の明らかでないドイツの小雑誌に載せられたという。しかし、その翻訳の存在はこれまで確認されていないようである。

<sup>3</sup> *Le Décaméron russe. Histoires et nouvelles traduites des meilleurs des auteurs par M. P. Douhaire*, Paris, 1855. 以下、同書からの引用頁は本文中に数字で示す。

編である。タイトルにドストエフスキイの名は付されていないが、序文の注に「*Les Pauvres Gens* という題の非常によく知られた小説の抜粋」と断り書きがあって、(XIV)ロシア文学を多少知った者には原作がドストエフスキイの作品とわかる。

小説集の訳者 M.P. ドゥエールは序文のなかでロシア文学について簡単に紹介し、ロシア文学が複雑な構成や多数の配役を必要とする長編小説(ロマン)の領域よりも初歩的な語りのコントの領域で成功し、またポーヴェスチと呼ばれる中編小説に秀でる、とつぎのようにいう。

しかし、それにもかかわらずとりわけ文学にはこの東方的な特徴が残されている。外国文学の形式を模倣しようとする傾向やそのようないろいろな試みの成功にもかかわらず、ロシア人がもっとも成功したのは依然ごく初歩的なジャンル、語りの領域であった。(中略)

じっさい、もはや詩人のいないロシアには——今日詩人のいる国があらうか——すぐれた語り手たちがいる。わたしは意図して語り手たちと言うのだ。なぜなら、ロシア人が得意なのはいわゆるロマンではないからである。ロマンのような複雑な構成と曲がりくねった回廊、多数の配役をもつ大きな構築物はまさしくロシア人の仕事ではなく、その領域では彼らはひどく不毛でこちない。(VI—VII、傍点部分は原文のイタリック)

そして、ロシアのコントやポーヴェスチには風俗や歴史、純粋なファンタジーやほろりとする情景、ユーモラスな夢想などがすばらしい形式や調子のもとにあつて、そのような面を紹介するために語りの才能がもっともよく刻印された作品をこの作品集に集めた、と述べる。またそれぞれの小説の特徴を紹介して、ゲルツェンとドストエフスキイの作品について現実が大きな要素を占める作品である、とつぎのように説明する。

最後の三つの作品は独特の性格をそなえている。そこでは現実が空想より大きな場所を占めている。彼らはロシアの生活の奥まった目だたない片隅を描こうとする若い作家に属する。それは独自の価値をもつと思われる真の啓示である。この小さなタブローを埋める情景は旅行者が大通りで目にする光景ではなく、また高位の肩書をもった人物が大国のいつも多少整えられた国内に迎えられるときに見る光景でもない。それはイギリス人が at home というようないわば家庭内のロシア人を、西洋からもたらされた習俗の束縛から解放された真のロシア人、この国の素朴な表現で言えばナスターシー・ルースキイ・チラヴェークを描いている。たしかに、そこにはつかの間の情景があるだけである。しかし、それがどんなに不完全なものだろうと、ロシア人が彼らの二世紀にわたる文明を否定し、彼らの古い習俗にふたたび向かおうとしている現在、それは興味ぶかいものだ。(XIV)

そして最後に、ロシア人の文体の魅力はロシア語に固有の土着的なもので、翻訳ではそれ

が消えてしまうために有名な作品も国外ではめったに成功しない、スラブの才能が明敏な観察と気まぐれな精神に身をゆだねているこれらの素描は、野心的な構成の作品よりもロシアの特徴をよく描いているように思え、それがこれらの作品を選んだ理由なのだ、と述べて紹介を結んでいる。(XV)ロシアではそのころ長編小説の黄金時代が始まろうとしていたが、それ以前はプーシキンやゴーゴリの独特な語りによる短編小説に秀でた国と見られていたことがうかがえる。

それでは『娘刺繍師』はどのような小説だったろうか。

『娘刺繍師』は先述のように『貧しき人々』のワルワーラをヒロインとして彼女が残した手記をロシアに渡った語り手のフランス人が紹介するという話で、手記の前後に原作にはない書き加えがある。たとえば、物語は訳者の創作によってつぎのように始まる。

わたしはロシアから女性の見事な衣装を一着もって帰りたいと思っていた。地方のさまざまな魅力が急速に失われていくにもかかわらず、まだいくつかの県に残っていてわたしが宮廷の全国舞踏会で感嘆した衣装のようなものを。ただ、その選択に迷っていた。

「わたしを信じてくださるのなら、トゥヴェーリの衣装になさい」、とわたしがこのもくろみを話した0公爵夫人は言った。「それがもっとも高貴で優美です。ギリシャ的な優美さと東方のきらめきとが一体となっているのです。でも、ランブイエ邸で人々が言っていたように、一流の縫い手に注文なさい。ワルワーラ・イワーノヴナに匹敵する縫い手はいないとあらかじめ申しておきます。<sup>4</sup>彼女はわたしのお気にいりで、魅力的なとても好感のもてる娘さんです」。(285)

そして、夫人は語り手をワルワーラのもとへ案内する。夫人よれば彼女は没落して両親を亡くした旧家の娘で教育もあり、よくあるように大家の侍女にもなれた。しかし、彼女はそれを望まず働くことを選んだという。ワルワーラはその気立てのよさと美しさゆえに金持ちとの結婚も望めたが、彼女が父親と呼ぶじっさいにはそうでない少し気のふれた老人と別れたがらなかった。(286—7)

男がヴァシーリ島の彼女の住居を訪れてみると、ワルワーラはそのポクロフスキイ老人と彼女の小母、そしてフィンランド人の料理女と中二階に住んでいた。老人は一人息子のペーチンカが死ぬときに残した本をもち、字が読めないのにたえずその本をめくっている。息子の死が信じられずどこかから帰ってくると思っていた、本が自分と息子の仲立ちをすると考えているのだった。語り手はワルワーラが病気で、なにか悲しみをいただいているのに気づく。

ワルワーラに衣装の注文をしてからのち、男は公爵夫人からワルワーラが重い病気で服の仕事が進んでいないことを知らされる。そこで彼女を仕事から解放して安心させようと、夫

---

<sup>4</sup> 翻案では原作のワルワーラ・ドブロショーロワがワルワーラ・イワーノヴナという名に変えられている。

人と一緒にワルワラを見舞った。

後日公爵夫人に乞われて夫人のもとへ訪れると、フランス語で書かれたワルワラの手記を見せられる。そして、物語はここから『貧しき人々』の前述のワルワラの子供時代の回想に移る。

この部分は息子のもとを訪れるポクロフスキイ老人を描く部分や、ワルワラが老人と一緒にその息子にプーシキン全集を贈るエピソードなどが大幅に簡略化されているのを除けば、細部に多少変更や省略はあるもののほぼ原作どおりに訳されている。手記はポクロフスキイ老人が息子の棺桶を運ぶ荷馬車を追って駆けて行く有名な場面のあとに、原作にないワルワラの母親の葬式があって終わる。ついで物語はワルワラの死を伝えるつぎのような一節で結ばれる。

手記はそこで終わっていたが、私はそのあとを知っている。

三日後、ワルワラ・イワーノヴナは亡くなった。公爵夫人と私は葬式に出たが、彼女の小母は現れなかった。ポクロフスキイ老人も賄いのフィンランド女に伴われて棺の後に従った。その哀れな狂人は笑うのだった。「ワルワラ・イワーノヴナがペーチンカを探しに行く。じきに彼らは戻ってくるだろう。そうしてみんな一緒になるんだ！」。

原作では結婚することになって終わるワルワラを訳者が勝手に死ぬことにしてしまうのに驚かされ、それでも原作にいちおう似合った結びがつけ加えられているのに苦笑させられるが、原作のもち味を巧みにとり入れた話になっている。訳されたワルワラの手記は当時からロシアでも有名な部分で、『貧しき人々』からの抜粋としては当をえた選択であった。センチメンタリズムの発揮されたこの個所がフランスの読者にも訴えるところがあると判断したとみられる。著作権のまだ確立していなかった当時、作者に無断で原作を変更することは日常茶飯事として行われていた。ドストエフスキイ自身バルザックの『ウージェニー・グランデ』を適度に手を加えて翻訳したのである。西欧における初訳としてドストエフスキイの名が明示されておらず設定も変えられているが、物語そのものは短編として不自然でない作品になっている。これにつぐ翻訳が出るのははじめにふれたように1864年の『死の家の記録』の独訳や1881年の同じ英訳を待たねばならないので、この翻訳は時代を先駆けたものといえた。

なお、『ロシア・デカメロン』のような翻訳が出た背景にクリミア戦争にともなう西欧でのロシアへの関心の高まりがあり、当時フランスでロシア文学の翻訳がいくつもおこなわれていたことについては、ゲルツェンの友人として知られる亡命活動家の N. サゾーフが1856年『サンクト・ペテルブルグ報知』のフェリエトンで報じていた。<sup>5</sup>『ロシア・デカメ

---

<sup>5</sup> K. Штахел, Парижские новости, 《Санкт-Петербургские ведомости》, 1856. no. 42. パリ、1856年2月17日の日付がある。なお、K. ШтахелはN. サゾーフのペンネーム。サゾーフについては拙稿、「ニコライ・サゾーフ考——ボードレールの

ロン』もそのなかで趣味を欠いたあてずっぽに集められた拙劣な翻訳の一例としてあげられている。そして『刺繍家』についても、フランス人に興味をもたせるために訳者のドゥエールが自分を登場人物のひとりとして登場させた、とあきれて述べている。物語の語り手をドゥエール自身とみたものらしい。サゾーノフは前年6月の『アテネオム・フランセ』でも『ロシア・デカメロン』に言及しているというので、<sup>6</sup>この小説集についてはロシアでも多少知られていたと推測される。ただし、ドストエフスキ自身はそのころセミパラチンスクで流刑後の軍務についていて、これらの記事を目にしていたか定かでない。彼の書簡やノート類を見る限りこの翻訳について知っていた形跡はなく、翻案とはいえずでにこのころ彼の作品が西欧に紹介されていたことは知らなかったようである。

## (2)

ところで上に紹介したような作者に無断での大幅な脚色、変更は、著作権の確立していなかった当時にあつては日常茶飯事のように行われていた。ワルワーラが死んでしまうようなひどい変更のもう一つの例に、ニーチェがいち早く注目したことで知られる1886年の『地下室の手記』の仏語訳がある。ニーチェは87年2月本屋で偶然手にしたまだ名前も知らなかったドストエフスキの小説を読んで、その心理洞察の鋭さに打たれた。<sup>7</sup>この翻訳はドストエフスキの初期の短編『女主人』(1847)と『地下室の手記』(1864)の第二部を合体させて『地下の精神』(*L' esprit souterrain*)と題した翻案で、第一部が「カーチャ」第二部が「リーザ」と名づけられている。そして、驚くべきことに『地下室の手記』の第二部にあたる「リーザ」の部分は、『女主人』の主人公オルドイノフが書いた手記ということになっている。そのために『娘刺繍師』と同じように第二部のはじめに訳者が書き加えをおこなひ、オルドイノフが残した手記を召使のアポロンから買いとった語り手が読者に提供するという、やはり『娘刺繍師』に似た設定作りをしている。<sup>8</sup>たしかに『地下室の手記』の主人公は、オルドイノフのような1840年代の夢想家が現実の社会にぶつかり歪んで成長した後日像と見ることができ、両者を結びつけるのはまったく荒唐無稽なことではない。原作の手記に現れる「地下」の語に注目して、ペテルブルグの片隅に逼塞する光と生活を欠いた二人の自意識の劇に「精神的な地下室」を見出し「地下の精神」と題したのも、作品の本質をとらえた命名といえよう。しかし、もともと別の小説を一つの作品として合体させた乱暴さにはさすがに批判があつたようで、訳者のアルペリヌ - カミンスキイは1929年の再版のさいにつけられた序文「序に代えて——どのようにドストエフスキイは翻訳されたか」のなかで、原作どおりに翻訳しなかつた理由についてしきりに弁明している。すなわち、筋が込みいっ

---

紹介を中心に」、『*Comparatio*』 vol. 10、2006、を参照。

<sup>6</sup> Michel Cadot, *L' image de la Russie dans la vie intellectuelle française (1839-1856)*, Paris, 1967, p. 452.

<sup>7</sup> 『ニーチェ書簡集Ⅱ 詩集』塚越敏、中島義生訳、筑摩学芸文庫、1994、89頁。

<sup>8</sup> Th. Dostoïevsky, *L' esprit souterrain*, adaptation revue et précédée d' une préface par E. Halpérine-Kaminsky, Paris, 1929, p. 132.

て複雑な構成のヴォギユエによればしばしば明解でない、A. ジッドによればぶよぶよに膨れあがったドストエフスキイの作品は、そうした小説になれていない1886年当時のフランスの読者には受け入れられず、そのままの翻訳ではドストエフスキイの普及は遅れたであろう、というのである。そして、その証拠に83年以来行われたドストエフスキイの翻訳の多くが手を加えられた訳で、そのような形で次々に翻訳されたことは、普及の障害になったのではなく普及を促進したことを示すものだ、と主張する。<sup>9</sup>忠実な翻訳でないにもかかわらずとみるべきか、読者のことを考慮して手を加えた訳であったからこそというべきか、判断の分かれるところである。それにしても、すでにドストエフスキイがよく知られ多くの翻訳が出ていた1929年の時点で、この翻案がプロン書店という名のおった出版社から再刊されていることに驚かされる。プロンはかつてヴォギユエの『ロシア小説』を刊行した出版元であり、ジッドの『ドストエフスキイ』やシェストフの『死の啓示—ドストエフスキイとトルストイ』も出版していたが、それだけドストエフスキイの需要があったということか。いずれにせよ、そのような原作をかなり歪めた翻訳をつうじてもニーチェがドストエフスキイを発見したことは、翻訳というものの不思議さとすぐれた作品の生命力の強さを示している。

---

<sup>9</sup> Ibid. pp. II - III, VIII - IX